

農林水産大臣賞受賞

仲良く、笑って、楽しく暮らせる集落を創造

受賞者 あす はしり かんが かい
明日の走井を考える会

りっとうし
(滋賀県栗東市)

■ 地域の沿革と概要

栗東市は滋賀県の南部に位置し、市の北部は琵琶湖から広がる平坦地、南部は背後の鈴鹿山脈から続く緑豊かな山地となっており、市全体面積の44%を森林が占めている。

気候は比較的穏やかで、平成25年の台風18号では甚大な被害を受けたものの、通常、災害の少ない地域である。

昭和29年に4つの村（栗太郡^{はるた}治田村、^{はやま}葉山村、^{こんぜ}金勝村、^{だいほう}大宝村）が合併し、栗東町となり、平成13年に栗東市となった。

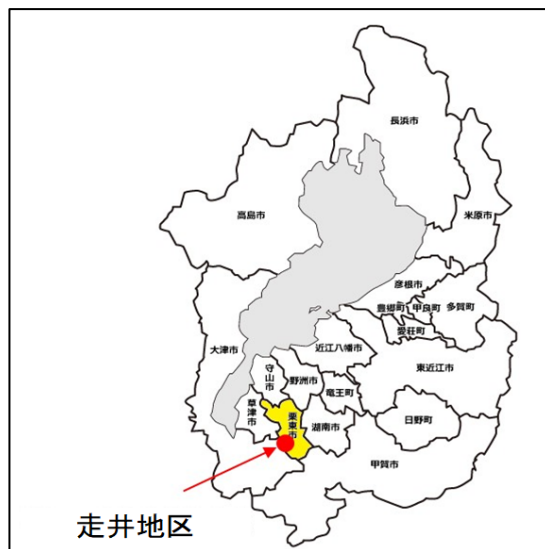
市内には、古くから東海道と中山道が通り交通の要所であったが、現在でもJ

R東海道本線（琵琶湖線）、名神高速道路、国道1号、8号等、日本の主要な交通網が巡っている。

JR草津駅が近く、平成3年にJR琵琶湖線に栗東駅が開設され、京阪神への通勤圏となっている。また、交通の便が良いことから多くの企業が立地しており、豊かな自然環境のある南部エリアには、昭和44年にJRA栗東トレーニング・センターが開場し、「馬のまち」としても知られている。

市全体としては、人口は増加しているが、南部の中山間地域では過疎化が課題となっている。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

走井地区は、栗東市南部の中山間地域に位置し、山林に囲まれた全戸数19戸、人口40名の限界集落である。昭和50年代頃までは、22戸、100人程度の人々が生活していたが、過疎と高齢化が急激に進んだ。

村（集落）は、820年頃建立された天台宗系の寺院である金勝寺を中心^{こんしょうじ}に金勝山^{こんぜやま}に建立された多くの寺院に深く関わりがあると伝えられており、当初は山深い場所にあった。村の場所は、宗教戦争により、金勝寺以外の寺院等が焼失、数度の転移を繰り返して現在に至っている。当地区は谷間に位置する典型的な中山間地であり、水稻を中心とした農業が営まれている。

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落の集合体	
地区の性格	機能的な集団等	
農家率 (内訳)	57.9%	
	総世帯数	19戸
	総農家数	11戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家	4戸
	1種兼業農家	0戸
	2種兼業農家	7戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	5,269ha
	耕地面積	723ha
	田	684ha
	畑	39ha
	耕地率	13.7%
	農家一戸当たり耕地面積	65.7ha

注：農地の状況は栗東市

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

走井地区では、代々、先祖の土地を守りながら、一戸当たり7a～2ha/戸の規模の農地が耕作されてきた。高度成長期以降、兼業農家が徐々に増えて稲作が続けられてきたが、昭和後期頃からは農業離れが進み、現在、農家は7戸と週末に帰省して作業する1戸のみとなっている。他に、土地持ち非農家が5戸という状況である。また、高齢化や若者の不参加により、清掃作業や、河川、水路、道路周辺の草刈り作業は、以前行っていた作業範囲が出来ず、継続が困難になってきている。さらに、集落に活気が無くなり、近所との交流が少なくなるとともに、支え合いの精神が薄れるとともに、集落の団結力が失われ始めたことから、集落の将来を危惧した4名が中心となり、会員の範囲を限定（1名/戸に限定無、集落外参加可）せず、あらゆる可能性を追求して自由に発想し、自由に活動することを理念とした「明日の走井を考える会」（以降「会」という。）を平成28年3月に結成、新たなことにチャレンジし、立ち向かう組織として活動することになった。



写真1 集落風景

(2) むらづくりの推進体制

ア 組織体制、構成員の状況

「会」は地域住民が中心となり、賛同者、協力者で構成されている。地域住民は、全員が「会」のメンバーであり、それ以外も親が住んでいた家がある人や、活動内容、農業に興味のある人々で構成されている。

さらに、令和2年から、(株)パソナ滋賀支店及びワールド・トレーディング(株)の2つの企業がパートナーとなっている。

イ 連携してむらづくりを行う他の組織の状況

「会」は、農業体験及び収穫祭を中山間地域で環境こだわり米を生産している「こんぜ清流米研究会」と共同で開催している。綺麗な水、減農薬で育てた「こんぜ清流米」は、朝夕の寒暖差も相まって美味しいお米に育ち、ブランド米として評価を得ており、感謝を込めて取り組み、かつPR活動も行っている。また、本研究会は、JA栗東市、金勝コミュニティセンター及びパートナー企業も参加している。

また、今年度、県の事業である「やまの健康」推進事業（都市と農山村との関わりを創出し、自然と共生する健康で幸せな暮らしの創出）に、栗東市観光協会及び金勝生産森林組合との合同の取り組みによる企画が採用された。本事業の推進にあたっては、滋賀県、栗東市の関係部局と連携、協議を行いながら、都市近郊、交通の便が良いなど、地の利を活かして人を呼び込むことのできる事業の検討が進められている。

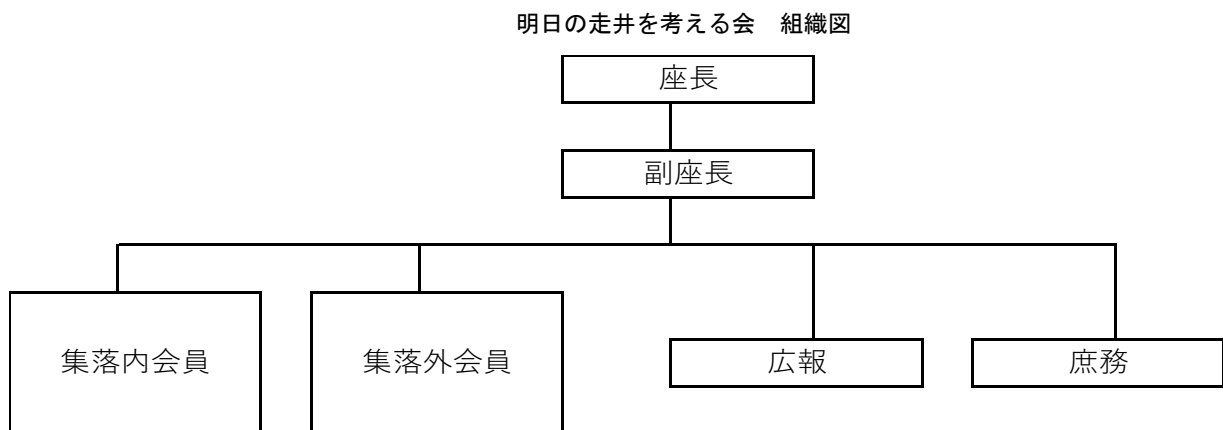
平成26年から受け入れを開始した棚田ボランティアでは、滋賀県や栗東市の協力のもと、PR活動を行い、ボランティアの方も増えており、農作業道でもある集落主要道路や水路の整備、走井集落の農地、農業用施設及び獣害防止柵等の維持管理活動に参加してもらっている。

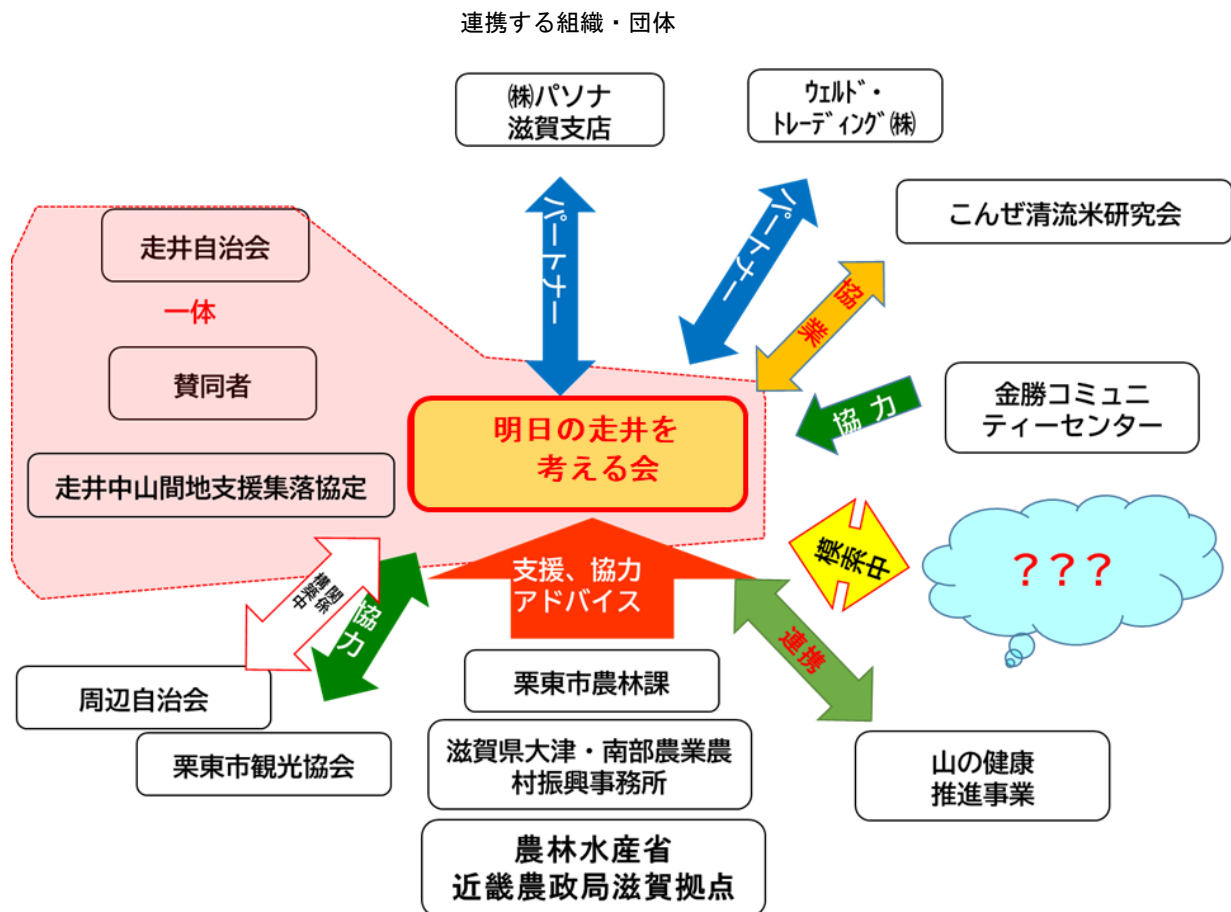


写真2 棚田ボランティアによる清掃

なお、本年2月末に棚田地域振興法に基づく指定棚田として旧金勝村の棚田が指定された。これに先立ち、令和2年12月に栗東市棚田地域振興協議会が設立された。指定棚田の指定申請及び協議会の設立にあたっては、農林水産省近畿農政局滋賀拠点、滋賀県及び栗東市とも連携を図った。今後、協議会で作成した指定棚田地域振興計画に基づき、棚田地域の活性化に取り組んでいくこととしている。

第2図 むらづくり推進体制図





■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

「会」は、集落の存続を目的として発足、参加者の要件は設けず、様々な人を受け入れ、自由な発想で新しいアイデアを取り入れることに寛容な、集落が一体となって活動している団体である。

条件の不利な地域で、遊休農地を復活させて稲作を再開させたり、収穫祭の実施、紫陽花ロードの整備、農業体験に取り組む等活動を実施、また金勝地域の棚田が棚田地域振興法の棚田指定を受け、棚田地域協議会が金勝地域全体で設立されたことから、今後「会」の活動が地域全体に広がっていくことが期待される。

2. 農業生産面における特徴

長年遊休田であった約 10a の圃場を復田し稲作を再開したことで 330kg の収穫を得た。また約 10 a の観光農園を始めたことにより、生産性の向上が図られている。「会」の活動である農業体験や収穫祭では、当地区でも生産している「こんぜ清流米」のPR活動に取り組んでいる。

「こんぜ清流米」は中山間地の綺麗な水、寒暖差の大きな気候を活かし減農薬、化学肥料の軽減を行う事で、安心安全で美味しいお米として周辺地

区と一緒に J A 栗東市と共にブランド化を図っているが、知名度はまだまだ低く更なるに P R が必要である。

現在、収穫祭での販売額は目標に届かない状況であるが、今後、販売額を増加させる工夫が必要であると認識している。また、新たな顧客を呼び込むため、観光農園に 300 本のブルーベリーを植樹した。将来的には、既に生産している桃やイチジク等も観光農園に加えたいと考えている。



写真 3 こんぜ清流米

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 生活・環境整備面での取組状況

紫陽花ロードは集落住民が日常生活で利用する道路であり、道路の路肩部を整備して紫陽花の植栽が行なわれた。取組が始まる前、住民は道路に繁茂する草を避けるように通行していた。また、道路に隣接する体験農場は、以前は背丈より高い草が生い茂る耕作放棄地であった。集落の過疎化、高齢化により管理が行き届かなくなり、耕作放棄田になるほ場は増加しつつあるが、住民にはあきらめの気持ちがあった。

しかし、今は県道から集落に至る道路に紫陽花が植えられ、年数回の手入れにより綺麗な状態が保たれている。体験農場は「紫陽花ロード」の中間付近にあり、梅雨期には紫陽花が咲き、道路からは田（以前は耕作放棄地）を一望することができる。田植え後のきれいなほ場、苗が成長し徐々に濃くなる緑の景観、秋には黄金色になる稲穂の景色を見ることができる。



写真 4 紫陽花ロード

紫陽花ロードは、通学路でもあることから、草が生い茂っていた道が、花咲く道に変わったことにより、安全面の向上が図られるとともに、子供たちの心の成長にも良い影響があるとの思いを皆が持つようになった。

(2) コミュニティの強化と都市住民との交流

復活させた遊休農地で、参加者自らが田植えを行い、秋には稲を刈り取る農業体験と、そのお米を味わう収穫祭はまさに都市住民との交流の場であり、集落の活性化に繋がる活動となっている。今年は新型コロナウイルスの影響もあり外部からの参加はできなかったが、電

話等で参加希望の問い合わせが多数あったことから、来年以降も多くの方の協力のもと取り組んでいく予定である。来年はアウトドア体験や以前実施して多くの来訪者があった蛍の鑑賞会も計画しており、身近に感じられる田舎の良さを体験してほしいとの思いがある。また、防災演習も検討するなど、いろいろなアイデアを盛り込んで開催する予定である。このような活動を通じて地域内のコミュニティが盛んになることで、集落の雰囲気明るくなった。



写真5 農業体験イベントの様子



写真6 収穫祭の様子

(3) 地域への定住促進、女性の社会参画推進の状況

当地区では移住者を受け入れたい意向であるが、空き家はあるものの、人が住むためにはリフォームが必要である。しかし、リフォームには多額の費用が必要であり、建て替えを検討されるものの、市街化調整区域のため制限もあることから、移住希望者とのマッチングに苦労をしている状況である。

また、女性の参画は、住民から2名、賛同者1名であるが、今後は女性の参加者を増やし、女性の意見や視点も取り入れていきたいと考えている。